ISSN 1349-385X

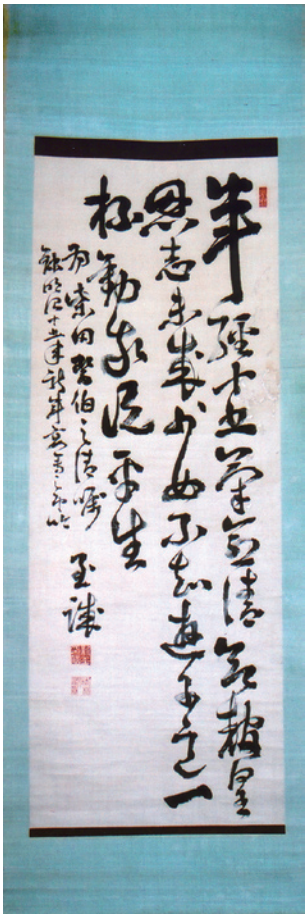
名古屋大学 大学文書資料室ニュース

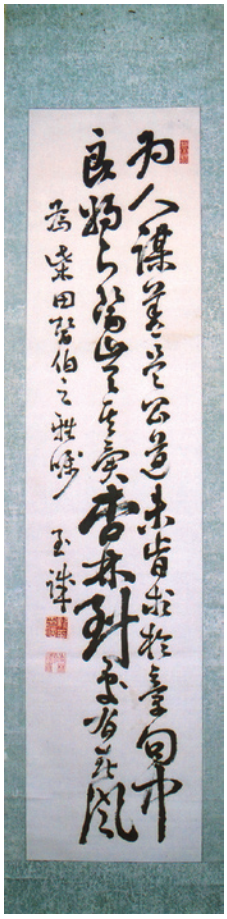
NUA Nagoya University Archives

Nagoya University Archives News　第27号　2010. 3

目次 Contents

名大創立70周年記念展示の開催 ―― 2
名大創立70周年記念図録が刊行されました ―― 4
公文書管理法が公布されました ―― 5
名大キャンパス史のスライドショーを増補しました ―― 6
紀要、ブックレット、「ちょっと名大史」の紹介 ―― 7
資料室日誌（抄） ―― 8
濵口総長が「名大の歴史をたどる」で講義 ―― 10





後藤新平自筆書掛軸（原物、左＝柴田光子氏、右＝柴田義守氏所蔵）

名古屋大学創立70周年記念展示の開催

企画展「医学教育の曙からノーベル賞まで」の開催

このたび、2009（平成21）年10月17日から12月26日を会期に、第19回名古屋大学博物館企画展「医学教育の曙からノーベル賞まで―名古屋大学創立70周年（創基138周年）記念―」が開催されました。博物館と大学文書資料室の共催によるものです。

本企画展は、本学が1939（昭和14）年に名古屋帝国大学として創立されて70周年、また本学医学部の前身である名古屋県仮病院・仮医学校が1871（明治４）年に設置されて138周年を記念するものです。

これまでの歴史展示

これまで、大学文書資料室（以下、資料室）では、本学の歴史を学内外に広くアピールするための展示活動を積極的におこない、ご好評をいただいてきました。

しかし、それらの展示の多くは、各種フォーラムやホームカミングデイなどのイベント当日に限定したものでした。資料室にとって、来学される全ての方々に本学の歴史を分かりやすく紹介できる常設展を設けることは、大きな目標の一つでもありました。

ただこういった常設展は、来学者の多くが通過する、本学のフロント的な位置になければ、意義が半減してしまいます。そのような事情もあって、これまでなかなか実現できずにきました。

創立70周年記念事業として

こうしたなか、2008年（平成20年）度から創立70周年記念事業が本格的に動き出しました。そして、記念事業の一環として、本学の歴史を通史的に紹介する企画展を記念式典当日にオープンさせ、さらにこの展示を基礎に常設展コーナーを設けることになりました。

それらの展示会場に選ばれたのは、本学の博物館です。博物館は、本学のシンボルである豊田講堂の向かってすぐ右側に位置し、本学の歴史に関わる展示もなされているなど、常設展には最適な場所といえます。問題は展示スペースですが、これは２階書庫110m^{2}を展示室に改修することで解決されました。

また展示の経費も、創立70周年記念事業の総長裁量経費から支出されることになりました。

展示の準備作業

具体的な展示の準備に取りかかったのは、2009年に入ってからです。資料室の羽賀祥二室長・山口拓史室員（３月まで）・堀田慎一郎室員、博物館の西川輝昭館長（当時、９月まで）・蛭薙観順准教授（９月から）からなる WG で協議を重ね、方針や分担を逐次決めながら作業を進めていきました。作業にあたっては、田渕宗孝氏（資料室事務補佐員）、中元崇智氏（70周年記念事業担当非常勤研究員）、今村直樹氏（同前）をはじめとするスタッフの協力を得ました。

展示内容としては、本学の歴史を通史として理解できることを前提としながらも、同時に創立70周年（創基138周年）記念展でもあるということで、創立と創基の時代を特集する内容を盛り込むことにしました。ただ、そこで問題となるのが展示スペースで、改修による立派な展示室ではあるものの、110m^{2}は決して広いとはいえません。そこで、前年に企画展をおこなった第八高等学校、2010年に創立90周年で企画展をおこなう予定の名古屋高等商業学校など医学部以外の前身校は、本格的には取り扱わないことにしました。

また、展示方法としては、学術的な水準の厳密な調査を前提としつつも、文章をできるだけ少なくし、あくまでも物品や写真、図表、映像による展示を主役にすることを強く意識しました。また、入場者が会場で手に取って見ることができるハンズオン資料を充実させることにしました。

展示会場の様子①

主な展示内容

ここでは、展示物の種類別に、それぞれの概略と特筆すべき展示のみを紹介します。展示の詳しい全容を知りたい方は、この３月刊行の『名古屋大学大学文書資料室紀要』第18号掲載の展示記録をご覧ください。

物品では、大小合わせて14個もの展示ケースを用意し、資料室や博物館などが所蔵する貴重な資料を多く展示することができました。ただ、開催期間が限られている企画展ではともかく、常設展では、経年劣化がいちじるしい資料の現物を展示することは困難です。そこで、予算の許す範囲において、資料の精巧なレプリカを製作し、それらを展示することにしました。

愛知医学校一等助教諭任命書（複製）

中でも、会場の入口に設置して入場者の注目を集めたのが、後藤新平が愛知医学校の校長時代に揮毫した２つの大きな掛軸です（表紙の写真）。これは、愛知医学校教員であった柴田邵平のご遺族が所蔵するもので、やはり常設展にそなえてレプリカを製作しました。

パネル展示は、全体を６つのコーナーに分け、各コーナーに６枚ずつのＡ０版（84.1cm ×118.9cm）のパネルを製作しました。内容は、原則として基本的に写真、絵図、図表のみとし、キャプションも極力短くしました。

展示会場の様子②

そのほか、パネル展示で一つの目玉としたのが、名大史年表とキャンパス地図の大パネルです。年表は、創基以来138年の歴史を、幅390cm の大パネルとして掲げました。キャンパス地図は、名大および前身諸学校のキャンパスの変遷を、名古屋を中心とする地図等を用いて分かりやすく図示したものです。とりわけ年表パネルには、多くの入場者の方々が、思い思いの時代の箇所に足を止めてご覧になっていたようです。

また、本企画展の特徴の一つとして、多くの種類の映像コーナーを多く設けたことが挙げられます。展示室において、「名古屋大学のあゆみ―キャンパスの変遷―」（スライドショー、資料室製作）、「名古屋大学豊田講堂　1960－2005」（スライドショー、資料室製作）、「名古屋大学プロフィール DVD」（広報室製作）、「名大の授業」（オープンコースウェア委員会製作）の４つを上映しました。とりわけ「名古屋大学のあゆみ」は、本企画展のため、鶴舞キャンパスの歴史の章を新作したものです（詳しくは本ニュース６頁を参照）。

さらに、本企画展が力を入れたものに、ハンズオン企画があります。

内容は、重要な名大（史）関係者を１人１枚のカードで紹介した「名古屋大学 Who's Who?」、名大祭の全50回のパンフレットのコピー（表紙と主な１頁）をまとめた「名大祭の五十年」、体育会・サークル紹介、名帝大初代総長渋沢元治が学生に配布した小冊子『我等の学園』（簡易複製）、の４種類です。とくに「Who's Who?」は、現在44人のカードがありますが、長期企画として、徐々に数を増やしていく予定です。

「名古屋大学 Who's Who?」

そのほか、本企画展の連動企画として、会期中に４回にわたる博物館特別講演会（杉山寛行理事・羽賀室長・高橋昭名誉教授・堀田室員）をおこないました。

開催の結果とこれから

以上のような本企画展は、会期中に4,920人、とくにホームカイミングデイ当日には、１日で1,120人の入場者があり、好評のうちに幕を閉じました。また、今年１月14日の全学同窓会関東支部新年交流会会場（学士会館）でも、一部を移設して展示しました。

来年度から予定されている常設展では、本企画展を基礎にして、さらに調査研究の成果を盛り込みながら内容を充実させていきたいと考えています。

資料室だより①

○名古屋大学創立70周年記念図録

『知と創造の拠点　名古屋大学の歴史』が刊行されました

このたび、名古屋大学創立70周年（創基138周年）の記念図録として、『知と創造の拠点　名古屋大学の歴史』（名古屋大学編刊、Ａ４版、オールカラー63頁）が刊行され、昨年10月17日に挙行された記念式典において、出席者にもれなく配布されました。これは、杉山寛行理事を委員長とする執筆委員会の下、大学文書資料室が中心となり、杉山理事および総務部秘書課、総務課の多大な協力を得て編集されたものです。

この図録は、前身校から現在までの本学の歴史を、それぞれの時代の写真によってつづったものです。写真には逐一キャプションを付け、４つの章にはそれぞれの時代に対応する正確な年表、本学所蔵の学術資源を紹介するコラム、巻末には資料編を入れました。また付録として、1943（昭和18）年の名古屋帝国大学開学記念式典で記念品として配布された、記念絵はがきを複製したものを綴じ込んであります。

掲載写真は、大学の本部事務局・各部局、生活協同組合、職員組合などから新たに発見されたものを積極的に盛り込みました。とくに、戦後すぐの理学部化学科第２回卒業生の記念写真（1945年）は、銅板から現像した大変貴重なものです。そのほかにも、東山総合学園計画を報道した『名古屋大学新聞』や、理学部化学教室の看板、「名古屋帝国大学之印」などのモノ資料の写真も掲載しました。

閲覧をご希望の方は、大学文書資料室までご来室ください。また、この３月刊行予定の『名古屋大学大学文書資料室紀要』第18号において、掲載写真目録を添えた編纂記録が掲載されることになっています。

記念図録の表紙

理学部化学科第２回卒業生（1945年）

公文書管理法が公布されました

昨年７月、「公文書等の管理に関する法律」、いわゆる公文書管理法が公布されました。

この法律は、その名称の通り、今まで必ずしも十分ではなく、機関によって不統一であった公文書管理のあり方を、統一的なルールによって定めようとしたものです。

公文書管理というと、一般の事務職員が業務で取り扱う文書の管理のことで、業務に必要なくなった文書を歴史資料として保存・公開するアーカイブズ（文書館）には、直接関係しないのではないかと思われるかもしれませんが、決してそうではありません。

法律の目的を示した同法第一条では、「行政文書等の適正な管理、歴史公文書等の適切な保存及び利用等を図」る、とうたわれています。つまり、行政機関の活動を「現在及び将来の国民に説明する責務を全う」することが、同法の目的であるとされているのです。むしろ、アーカイブズにきわめて密接な関係を持つ法律であることが分かります。

しかし、公文書の管理が、歴史的公文書を適切に保存することと、どのように関わるのでしょうか。これについては、同法がライフサイクルを一貫した公文書の管理を求めていることが重要になります。

公文書は、公務員等が業務遂行のために作成することによって生まれ、やがて日常的には使用されなくなりますが、定められた期間は事務組織等で保存されます。ここまでが現用文書の段階です。保存期間が満了した文書（非現用文書）は、歴史的に重要なものはアーカイブズ等で保存され、それ以外のものは適正な方法で廃棄されます。こうした一連の文書の性格変化の流れを、文書のライフサイクルと言います。

これまでの公文書管理は、ややもするとライフサイクルが現用文書と非現用文書の境目で分断され、アーカイブズへ歴史的公文書が適切に移管されることを妨げていました。これを義務づける法律もなかったのです。

同法が画期的なことの１つは、現用文書の段階から、国立公文書館等や専門家の助言をふまえつつ、保存期間が満了した後にどのように処置するか、つまり歴史資料として保存するか廃棄するかを、あらかじめ判断することが求められていることです。ここで歴史的に重要であると判断された文書を、同法では「歴史公文書」と定義しています。すなわち、公文書が歴史資料となるのは、保存期間満了後（非現用文書の段階）なのではなく、すでに現用文書の段階から歴史資料として位置づけているわけです。

さて、公文書管理法は名古屋大学を含む国立大学法人にも適用されます。これによって、大学文書資料室（以下、資料室）のあり方は、どのように変わるでしょうか。

同法では、保存期間が満了した歴史公文書は、「特定歴史公文書」として「国立公文書館等」に移管することを定めています。「国立公文書館等」については、別に政令で定めるとされていますが、資料室もこれに含まれるものと考えられています。もしそうであれば、資料室は本学の「特定歴史公文書」を保存・公開する機関となり、これは今までと変わりません。

また、これまでも資料室は、文書のライフサイクルを一貫した、すなわち現用文書と非現用文書の境目をなくした（シームレスな）文書管理を提唱し、システムの構築を推進してきました。その意味で、公文書管理法の理念は、資料室の、ひいては本学のそれと全く一致しています。

しかし、この理念を実務レベルで遂行することは、決して容易ではありません。資料室でも、諸事情により残念ながらその実現に至っておらず、非現用になったあとの文書を評価選別して、歴史的に重要なものを保存するという作業をおこなっているのが現状です。

現在、総務部総務課と資料室では、すでに非現用となった文書の評価選別および廃棄を、本部事務局や各部局レベルで実施できるような基準やシステムを検討しています。ただ、それだけでは公文書管理法への対応として十分とはいえません。

まずは少なくとも、これから作成される文書については、現用の段階から歴史公文書であるかどうかを判断する、基準やシステムをつくっていく必要があります。あるいは、文書を作成する段階、もしくは文書をファイリングする段階で、すでにそれが歴史公文書であるか否かを判定してしまうようにすれば、より効率的といえるかもしれません。

公文書管理法は、公布後２年以内に施行することになっています。いずれにしても、全学レベルにおける早急な対応が必要になるでしょう。

資料室だより②

○スライドショー「名古屋大学のあゆみ」を増補しました

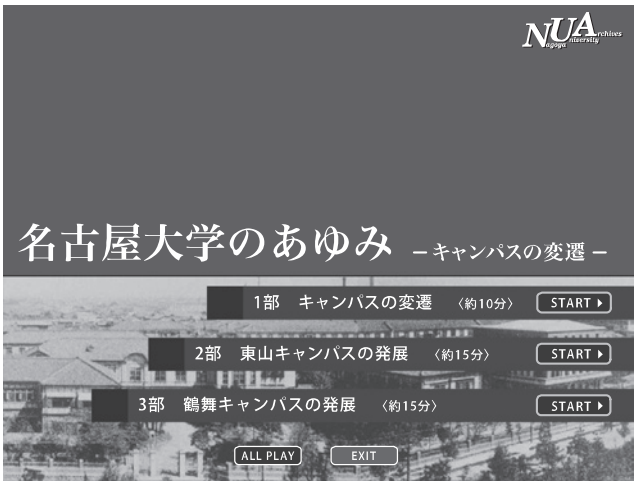
このたび大学文書資料室では、スライドショー「名古屋大学のあゆみ―キャンパスの変遷―」を大幅に増補しました。

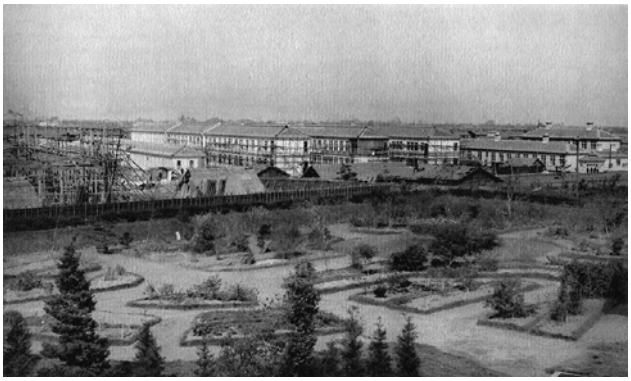
資料室が2005（平成17）年に製作したスライドショーは、名古屋大学やその前身諸学校のキャンパスの歴史を、CG 等を用いながら紹介したもので、第一部「名大キャンパスの変遷」(10分)、第二部「東山キャンパスの発展」(15分）からなっていました。

そして今回、名古屋大学創立70周年記念事業の総長裁量経費を得て、新しく第三部「鶴舞キャンパスの発展」(15分）を製作しました。また第二部も、東山キャンパスの現状に合わせ、2005年以降に建設された建物の紹介などを加えました。

第三部は、名古屋大学のキャンパスとして最も古い歴史を持つ鶴舞の歴史を、前身校時代をふくめて概観したものです。キャンパス内の建物配置や敷地の変遷、戦災からの復興過程、最新の建物などを分かりやすく解説しています。また、鶴舞移転前の天王崎（現中区栄一丁目）の校舎や、建設途中の鶴舞校舎（下の写真）など、近年見つかった写真も積極的に盛り込みました。

完成したスライドショーは、昨年10月17日から12月26日まで開催された、第19回博物館企画展「医学教育の曙からノーベル賞まで―名古屋大学創立70周念（創基138周年）記念―」（詳しくは本ニュース２～３頁参照）の会場で上映し、大変好評を博しました。これからも、さまざまなイベント等に活用していく予定ですが、ご覧になりたい方は、大学文書資料室にご来室ください。





建設途中の愛知県立医学専門学校の鶴舞校舎（大正初期）

資料室だより③

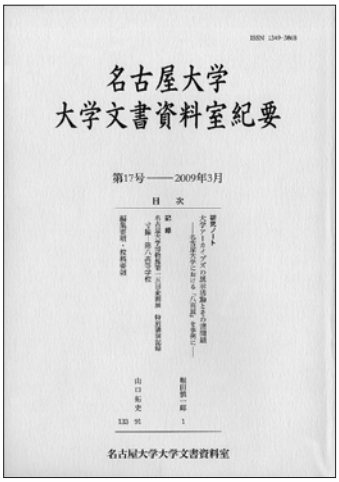
○紀要、ブックレット、「ちょっと名大史」を刊行しました

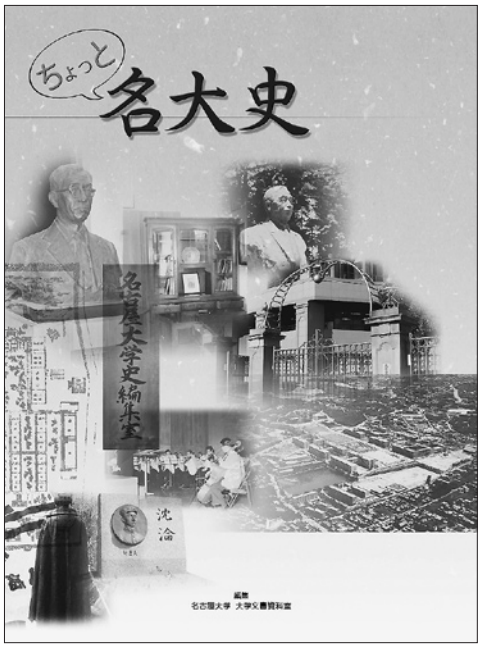
昨年３月、大学文書資料室では、『名古屋大学大学文書資料室紀要』第17号、名大史ブックレット第13巻、『ちょっと名大史』増補版を刊行しました。

紀要は、本ニュース前号でも紹介した、一昨年10～11月におこなわれた博物館企画展「伊吹おろしの若者たち―八高創立百年の歴史から―」（八高展）の特集号ともいえる内容になっています。八高展を事例として、大学アーカイブズにおける展示活動について論じた研究ノートと、八高展に連動した博物館講演会の音声記録を翻刻したものが掲載されています。本紀要は、室外・学外にも広く門戸を開き、記録史料学（アーカイブズ学）および名古屋大学史を含む高等教育史に関する論文の投稿を募集しています（レフリー制度あり）。

ブックレットは、『名古屋大学 歴代総長略伝―名古屋大学をひきいた人びと―』です。名古屋帝国大学の渋沢元治初代総長から現在の濵口道成総長までの13代の歴代総長と、前身諸学校の主な校長・学長を取り上げました。それぞれの経歴や学問、任期中の事績などを、１人２～３ページで分かりやすく解説したものです。

『ちょっと名大史』増補版は、名古屋大学の月刊広報誌『名大トピックス』の裏表紙に資料室が連載しているコーナーを単行本にまとめたものです。さまざまなイベントなどで配布され、多くの方々に好評をいただいています。今回、２年24回分を増補し、計82回を収録しました。





資料室日誌（抄）

２月１日　中元崇智非常勤研究員（70周年記念事業関係業務担当）が着任。

２月６日　博物館と企画展（創立70周年記念名大史展示）打ち合わせ（以後、２／16、２／25、３／12、４／２、４／３、４／８、４／21、５／13、５／14、６／10、６／16、６／23、７／14、７/16、７／27、７／28、７／30、８／４、８／５、８／７、８／19、８／21、８／26、８／28、９／３、９／９、９／18、９／24、９／29）。
総務部秘書課より資料移管。

２月10日　堀田慎一郎室員が、『中経連』掲載の名大紹介原稿の執筆者と面談（３／11も同）。

２月17日　愛知県史編さん室近現代史社会文化部会が資料調査のため来室。

２月23日　八高・名帝大卒業生高田文夫氏より資料受贈（８／10も同）。

２月24日　大学文書資料室運営委員会（第16回）開催。
名大創立70周年記念図録打ち合わせ（以後、４／３、４／９、４／23、４／30、６／18、７／９、７／28、７／30、９／30）。
高崎経済大学附属図書館事務室長補佐が視察のため来室。

３月２日　天野エンザイム（株）常勤顧問富永隆一氏来室、資料を閲覧・複写。

３月５日　核融合科学研究所職員２名が資料室を視察。

３月10日　柴田純子氏より柴田雄次名誉教授資料を受贈（８／25も同）。

３月12日　天野エンザイム（株）社員が資料室を視察。
高橋理事・事務局長と、法人文書の評価選別基準について面談（資料室・総務課）。

３月13日　ホームカミングデイ実行委員会に出席（以後５／22、６／26、９／25、11／13）。

３月16日　事務補佐員採用候補者の面接を実施。

３月18日　経済学図書室より資料移管。

３月24日　濵口道成医学系研究科長を訪問し、総長就任後の自校史講義担当を依頼。
「文書の取り扱いに関する打ち合わせ」（高橋理事・総務課・総合企画室・資料室）。

３月26日　八高会から卒業生寄贈資料を受贈。
名古屋大学交響楽団より資料を追加受託。
施設管理部施設整備課より資料移管。

３月31日　山口拓史室員が退職。
武藤英幸専門職員、若山裕司主任が異動。
『名古屋大学大学文書資料室紀要』第17号、『名古屋大学大学文書資料室ニュース』第26号、『名大史ブックレット』13、『ちょっと名大史』増補版を刊行。

４月１日　久田淳子主任、田渕宗孝事務補佐員が着任。

４月２日　新任教員研修の会場でポスターおよび刊行物を展示。

４月９日　藤井理事が資料室（本部別館）を視察。

４月14日　全学教養科目「名大の歴史をたどる」講義開始。
堀田室員が新規採用職員研修で名古屋大学の歴史について講演。

４月16日　総務部秘書課よりノーベル賞関係新聞資料を移管（４／24も同）。

４月22日　全学年度計画評価ヒアリングに出席（総務課永家課長補佐・堀田室員）。

５月１日　今村直樹非常勤研究員（70周年記念事業関係業務担当）が着任。

５月12日　法人文書の評価選別作業（以後５／19、６／２、６／９、６／16、６／24、10／20、10／21、10／27）。

５月14日　キタン会と名高商展示などについて協議（５／27も同）。

５月19日　広報室より写真およびネガ等移管。

５月20日　毎日新聞記者が来室し、伊勢湾台風時における名大生の救助活動について取材。

５月21日　中京大学史編纂室長が資料室を視察。
『名古屋大学プロフィール DVD』の製作業者に写真を資料提供。

５月27日　大学文書資料室運営委員会（第17回）開催。

６月４日　内山晋名誉教授より資料受贈（12／10も）
小方芳郎名誉教授より資料受贈。

６月９日　全学教育科目「名大の歴史をたどる」において、濵口総長が講義。

６月11日　情報文化学部教務学生掛所蔵の旧教養部文書の評価選別し、資料室に搬入。

財務部財務課で法人文書の評価選別作業。
6月18日　藤田秀臣名誉教授より資料受贈。
6月27日　キタン会と名高商展について協議。
6月29日　日経新聞名古屋支社記者が来室し、名大創立70周年について取材。
7月2日　創立70周年記念図録執筆委員会(杉山理事、高橋理事、重網顧問、総務部秘書課、大学文書資料室、7／27にも開催)。
8月3日　杉山理事と資料室の将来構想等について面談（9／24、10／7、11／6にも面談)。
8月10日　『名古屋大学大学文書資料室紀要』第18号の原稿募集を公示。
8月18日　黎明会（岡崎高等師範学校同窓会）会長加藤貞夫氏が来室、岡崎高師資料の整理作業について打ち合わせ。
8月24日　椙山歴史文化館員が資料室を視察。
不老会（名大職員のOB会）より不老会関係資料を受託。
8月25日　創立70周年記念式典の濵口総長との打ち合わせに出席（羽賀室長・堀田室員)。
8月31日　事務補佐員採用候補者の面接を実施。
9月30日　青木千絵事務補佐員が退職。
大学文書資料室運営委員会（第18回）開催。
東海テレビが来室し、名大創立70周年記念関係資料を撮影。
10月1日　後藤朱美事務補佐員が着任。
法人文書の評価選別に関する打ち合わせ会（総務課）に堀田室員が出席（10／21も)。
国際企画課と海外向け広報誌に掲載する資料提供などについて協議。
10月17日　博物館企画展「医学教育の曙からノーベル賞まで」(博物館･大学文書資料室共催）が開幕（～12／26)。
キャンパスムービー「名古屋大学のあゆみ―キャンパスの変遷―」増補版が完成、上記の企画展で初上映。
『知と創造の拠点　名古屋大学の歴史』（創立70周年記念図録）が刊行される。
10月19日　情報文化学部にて法人文書の評価選別作業。
10月24日　羽賀祥二室長が博物館特別講演会で「名古屋大学の歴史を語る」をテーマに講演。
10月28日　共同教育研究施設第6実験棟に保管していた各種資料を第2実験棟への移動。
10月29日　第6実験棟にて法人文書等の廃棄作業。
10月31日　羽賀室長がSMBC（三井住友銀行）パーク栄のセミナーで、名古屋大学の歴史について講演。
11月18日　堀田室員がSMBCパーク栄のセミナーで、名古屋大学の歴史について講演。
11月19日　全学的運用定員に関するヒアリング（杉山理事・総合企画室・羽賀室長)。
11月25日　総務課と将来構想について打ち合わせ。
11月26日　堀田室員が、博物館特別講演会で「名古屋帝国大学の創立と新制名古屋大学の出発」をテーマに講演。
12月1日　堀田室員が個人情報保護管理者研修に参加。
12月4日　名高商展打ち合わせに出席(以後、11／20、12／4、12／15、12／18、1／18)。
田渕補佐員が個人情報保護に関する教育研修会に出席。
12月8日　堀田室員と田渕補佐員が石岡あづみ氏宅を訪問、故石岡繁雄氏関係資料を受贈し、資料状況の聴き取りを実施。
12月16日　広報室よりノーベル賞関係新聞資料移管。
12月24日　堀田室員が京都大学総合博物館の科研費研究会に出席（京都大学)。
12月25日～大学文書資料室運営委員会（第19回）を持ち回り審議で開催。
12月28日　附属図書館情報システム課より、故後藤重郎名誉教授関係資料の一部を移管。
1月8日　全国大学史展（全国大学史資料協議会東日本部会主催）に資料貸し出し。
1月12日　各部局に次期室長の推薦を依頼。
1月14日　全学同窓会関東支部新年交流会にて、企画展「医学教育の曙からノーベル賞まで」の一部を移設展示。

○濵口道成総長が
全学教育科目「名大の歴史をたどる」で講義

大学文書資料室では、前期全学教育科目（全学教養科目）において、「名大の歴史をたどる」を毎年開講しています。これは、入学したばかりの１年生を主な受講生として、名古屋大学の歴史を分かりやすく解説する講義です。最近、学生や職員の大学への帰属意識や学問へのモチベーションを高めることなどを目的とする自校史教育が注目されつつありますが、資料室では1999（平成11）年度から自校史の講義を開講するなど、全国の大学でも先駆的な取り組みをしてきました。

さらに2004年度からは、全15回のうちの１回の講義を総長が担当するという、これも全国に先駆けた企画をはじめました。ほとんどの学生は、入学式と卒業式で式辞を聴くくらいしか総長と接することがないのが普通であり、この講義は貴重な機会として受講生の好評を得ています。また、この回だけは特別に、名大の教職員とマスコミも聴講できるようにしています。

そして今年度の総長講義は、就任したばかりの濵口道成総長の初登場となりました。2009年６月９日（火）の第１限、IB 電子情報館大講義室で、200名近くの学生などが聴講しました。また、テレビカメラの撮影や数人のマスコミ関係者の聴講もありました。

講義のテーマは、「21世紀の名古屋大学」でした。濵口総長は、少子高齢化をはじめとする日本の厳しい現状を、外国と比較しながら明らかにしたうえで、これらを背景とする名大の現状と課題について述べました。さまざまなデータを駆使した、大変分かりやすく説得力のある内容で、学生たちも熱心に聴き入っていました。そして最後に、「名古屋大学から Nagoya University へ」をこれからの大学運営のスローガンとして掲げて、講義を終えました。

この講義の内容は、音声記録を翻刻のうえ、資料室から記録冊子として刊行する予定です。

講義の様子

身ぶりをまじえ、熱心に学生たちに語りかける濵口総長

名古屋大学大学文書資料室ニュース 第27号
Nagoya University Archives News No. 27

名古屋大学大学文書資料室
室　　長　羽賀祥二（教授・併任）
室　　員　堀田慎一郎（助教・専任）
主　　任　奥谷明稔
　　久田淳子
事務員　増田よしみ
　　田渕宗孝

発行日　2010年3月15日
編集
発行　名古屋大学大学文書資料室
名古屋市千種区不老町〒464-8601
電話：（052）789-2046
FAX：（052）788-6222
E-mail: nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp
印刷　株式会社荒川印刷
名古屋市中区千代田2-16-38